

2022年 8 月 7 日 平和聖日礼拝

メッセージ「弱さを中心に生きる」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙 I 12章 14-26 節

今日は「平和聖日」です。ですが、心穏やかにこの日を迎えられた方は、どれくらいおられることでしょうか。今年も先月から大変暑い猛暑日が続いていますが、そのような中、急激に局所的な豪雨が降ってきます。先週も東北地方や北陸地方で、記録的な豪雨があり、いくつもの河川が氾濫し、土砂崩れが起き、たくさんの家屋が浸水したりしました。今もなお不安の只中にあり、自宅に帰ることが出来ず、途方に暮れている方々も多くおられることと思いますが、神様がその方々と共におられて、支えられますようにと祈ります。

また新型コロナウイルス感染症の感染拡大も深刻です。この感染拡大の「第 7 波」では、日本が世界で一番、日ごとの新規感染者数が多く、感染が蔓延している国になりました。感染力が非常に強い現在のウイルスは、私たちの身近な所にも感染者を出しています。今年初めの「第 6 波」の教訓はなく、すでに保健所も病院もパンク状態で、なかなか連絡がつかず、予約もとれない状態です。大半の人は無症状や軽症で、自宅療養のようですが、その間に家族内で感染が広がり、出勤できなくなり、職場でも回らなくなっている現場も出てきています。とりわけ、基礎疾患を持ち、重症化しやすい方々の多い医療機関や、高齢者施設などの現場では、職員の方々の心身の疲弊は、大変なものだと思います。目の前の方々の命を守る最前線の働きをされている方々の心身が守られますことを祈りますばかりです。

昨日 8 月 6 日は、広島市の平和記念式典でした。ロシアによるウクライナ侵攻による戦争が続く中、国連事務総長が初めて参列し、約 13,000 発の核兵器が世界各地に保有されている現状を、「人類は、実弾が込められた銃で遊んでいる」ようだと言っていました。いつでも誤って発射してしまう危険性がある、ということです。……どうして、このような状況になってしまったのでしょうか。77 年前の広島と長崎への原爆投下後、これまでの間に、もう数えきれないくらいの戦争が、世界各地で行われ続けてきています。残念ながら、先の世界大戦、過去の教訓から、人類は何も学んでいないということなのではないでしょうか。

「どうして、戦争があるの?」と子どもから聞かれたら、皆さんはどのように答えられるでしょうか。少し古いものになりますが、2015 年に発表された「自由と平和のための京大有志の会」による「わたしの『やめて』」という「安全保障関連法案に反対する声明書(こども語訳)」がありますので、ご紹介します。

くにと くにの けんかを せんそうと いいます
せんそうは「ぼくが ころされないように さきに ころすんだ」
という だれかの いいわけで はじまります
せんそうは ひとつろしの どうぐを うる おみせを もうけさせます
せんそうは はじまると だれにも とめられません
せんそうは はじめるのは かんたんだけど おわるのは むずかしい
せんそうは へいたいさんも おとしよりも こどもも くるしめます
せんそうは てや あしを ちぎり ころも ひきさきます
わたしの ころは わたしのもの
だれかに あやつられたくない
わたしの いのちは わたしのもの
だれかの どうぐに なりたくない
うみが ひろいのは ひとをころす きちをつくるためじゃない
そらが たかいのは ひとをころす ひこうきが とぶためじゃない
げんこつで ひとを きずつけて えらそうに いばっているよりも
ころを はたらかせて きずつけられた ひとを はげましたい
がっこうで まなぶのは ひとつろしの どうぐをつくるためじゃない
がっこうで まなぶのは おかねもうけのためじゃない
がっこうで まなぶのは だれかの いいなりに なるためじゃない
じぶんや みんなの いのちを だいじにして
いつも すきなことを かんがえたり おはなししたり したい
でも せんそうは それを じゃまするんだ
だから
せんそうを はじめようとする ひとたちに
わたしは おおきなこえで「やめて」というんだ

この声明書が指摘しているのは、戦争は皆を傷つけ、不幸にする一方で、武器屋、軍需産業を儲けさせるといふことと、そもそもは相手を力でねじ伏せ押しえつけ、自分の言いなりにして操^{あやつ}りたい。裏を返せば自分がそのようにされたく無いから、先にやっ^あててしまおう、という自分自身の中の恐怖心や、虚無感、不安から来るものだ、ということなのではないかと思ひます。戦争は、些細なつまらない理由で始められるけれど、一旦始まってしまうと、石が坂を転がり落ちるように、途中で止まるのは難しい。だからこそ、始めさせてはいけない、ということなのでしょう。しかし、現にロシアとウクライナの戦争は続いていますし、1年半前にクーデターが起きたミャンマーでは、今なお「緊急事態宣言」が延長され続け、軍事政権による独裁、民主派への弾圧や処刑が続けられています。他にも世界の各地で、紛争があり、テロがあります。一体、どこに平和があると言えるのでしょうか。

聖書の中で「平和」を表す言葉「シャーローム」というヘブライ語は、現代ヘブライ語では「おはよう」や「こんにちは」のような挨拶の言葉で、朝昼晚いつでも使える挨拶の言葉なのだそうです。アラビア語の挨拶「サラーム」とも同じ語源から来ている言葉ですが、元々の意味は、「完璧」という漢語のように「傷が全くない状態」や、「完全に均衡、バランスが取れている状態」を表すことから、「無事」である、「平安」である、「平和」という意味で用いられるようになったようです。しかし、私たちの日常生活の中では、そのように「全く傷がなく」「完全にバランスがとれている」ことなど、実際にはあるでしょうか。それこそ「ほとんどない」のが現状ではないでしょうか。

今回の聖書の箇所、パウロが書いた「コリントの信徒への手紙Ⅰ」には、「平和（エイレーネー < シャーローム）」という言葉は、直接は出てきていませんが、「多様な部分からなる一つの体」について述べられています。前半の 14 節から 21 節までは足や手、目や耳などの具体的な体の部分の例なので、分かりやすく述べられています。「¹⁴ 体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。¹⁵ 足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁶ 耳が、『私は目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁷ もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。¹⁸ そこで神は、御心のままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。¹⁹ すべてが一つの部分であつたら、体はどこにあるのでしょうか。²⁰ しかし実際は、多くの部分があつても、体は一つなのです。²¹ 目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません」。つまり、「体は一つの部分ではなく、それぞれに形も役割も異なる様々な幾つもの部分からなっている」、だからどの部分が偉いとか、強いとか、そんなことではない、ということでしょう。

ここまでは比較的分かりやすいのですが、後半の 22 節以降が、少し難しくなります。「²² それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。²³ 私たちは、体の中でつまらないと思える部分にかえって尊さを見いだします。実は、格好の悪い部分が、かえって格好の良い姿をしているのです」……。この 23 節の言葉が分かりにくいかと思いますが、「つまらない」「価値がない」「貧弱だ」と見なされている部分を、何よりも尊重し、大切にすることによって、そんな「格好の悪い部分」が、全体をより良い姿に変えてくれる、調和をもたらしてくれる、ということなのでしょう。24 節にあるように、もともと「格好の良い部分」に、わざわざ何かをする必要はありません。「劣っている部分」「不足がちなところ」を、何よりも尊重して大切にすることによって、体の各部分が互いに配慮し合うことができ、それによって一つの体としてまとめあげられていくということです。

第2次世界大戦中にナチスに抵抗したドイツの牧師・神学者であったディートリッヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer, 1906-1945) の言葉に、「一番小さな環も、鎖にしっかりと組み合わされている時にのみ、鎖は切れることはない」(『共に生きる生活』) という言葉があります。たくさんの環っかが連なってできている鎖ですが、そこには大きいものも小さいものも、太いものも細いものもあります。そしてそれらがつなぎ合わさって一本の鎖でいられるのは、一番小さい環に合わせた力で引っ張られている時だけ。その一番小さい環の力、限界を無視して強く引っ張ったら、たちまち鎖はちぎれてしまうというわけです。ですから、言い換えれば、「一番小さな環を優先し、その環に合わせて張っている時にのみ、その鎖は一本の鎖として切れることはない」のだとすることができます。今回の聖書の言葉、パウロの書いた「コリントの信徒への手紙 I」に述べられていることもまた、体が一つの体として調和を保つためには、一番貧弱に見える部分、弱く、劣っていると思われる部分を最優先させること、それが全体の一致の秘訣であるということ、なのではないかと思います。「シャーローム(平和)」を実現するためには、どうすれば全体に傷がなく、バランスがとれるか。それは最も脆くて、傷つきやすく、弱い部分を大切にすること。小さくて壊れそうな環っかにこそ、それが壊れないように注意を払うこと。自分の中の「弱さ」から目を背け、見ないように蓋をするのではなく、むしろその「弱さ」を中心に据えて向き合うこと、弱さを中心にして生きること、「平和」はそこからしか始まらないということなのではないでしょうか。

「バリアフリー」という言葉も、私たちの暮らしの中で、よく耳にされるようになってきました。エレベーターにせよ、「多目的トイレ」にせよ、障がいや病気を持っている方々など、少数派と言われる方々に使いやすい設備や環境は、すべての人にとって使いやすい設備や環境でもあります。世の中の多数派の意見だけが尊重される社会では、少数派の存在は無視され、その意見は排除されてしまいますが、そのような社会では今は多数派に属している人も、いつ自分がそこから脱落し排除されてしまうかに、常におびえていなくてはなりません。それでは疑心暗鬼になってしまいます。弱さを隠し、弱くならないように虚勢を張るのではなく、むしろ弱さを中心にした社会、生き方こそが、すべての人にとって生きやすい、私たちの目指すべき平和の社会ではないかと思います。

平和をつくっていくためには、私たちはあまりにも無力です。目の前で困っていて助けを求めている人たちを見かけても、その全てに答えることもできません。それでも、そんな私たち自身の限界や弱さに目を背けて、蓋をしてしまえば、隣の人々の弱さを裁き、叩くことにつながってしまいます。自分自身の中に確かにある弱さを大切にして、そして自分が所属する社会の中にあっても、そこで最も小さく弱くされている人たちを大切にしていけるように、命と平和の源である神様と共にあって、私たちは導かれていきます。